

# ローマはビジョンを確立する - ナンバー・テン

最後の論争：ヨエル書、ニューヨークの陥落、そして再臨史におけるローマの象徴

Jeff Pippenger

2024-08-26

私が再臨運動の歴史におけるローマの象徴をめぐる他の歴史的議論と結びつけて取り上げたい最後の論争は、ヨエル書に関するものである。その論争は2001年9月11日以降に起こり、その時期の状況を考慮しなければ、いくつかの微妙な点を見落としてしまいかねない。そうした状況を文脈に位置づけるには、ミラー派の歴史を考察する必要がある。1840年8月11日、ヨハネの黙示録9章15節の時の預言が成就した。

そして、人間の三分の一を殺すために、一時間と一日と一か月と一年のために備えられていた四人の御使いが解き放たれた。黙示録 9:15。

その聖句は、「一時と一日と一ヶ月と一年」が391年と15日に相当するとしている。四人の天使は、イスラムが台頭してローマに戦争をもたらした時期を表しており、その開始は1449年7月27日であった。起点は、別の150年の時の預言の終点を用いることで定められた。最初の150年の時の預言は、第一の災い、すなわち『黙示録』第9章の第5のラツパの歴史の中に示されている。150年の預言が1449年7月27日に終わったとき、今私たちが考察している時の預言が始まり、391年と15日後の1840年8月11日にその預言は終結した。

ウィリアム・ミラーは、黙示録9章に登場する諸勢力はイスラムを象徴するものだと理解していた。1840年8月11日という期日に先立ち、ミラー派のジョサイア・リッチは、その預言に基づき、1840年にオスマン（トルコ）の覇権が終わるとする予告を公にした。8月11日の10日前、リッチはその予告を微調整し改訂して、預言が成就する時を単に年だけでなく、年・月・日まで特定した。出来事が成就したとき、シスター・ホワイトは、リッチの予告がミラー派の宗教界に及ぼした影響について論評している。

「1840年には、予言のもう一つの顕著な成就が広く関心を呼んだ。その二年前、再臨を宣べ伝える指導的な説教師の一人であったジョサイア・リッチが、『黙示録』9章の解説を発表し、オスマン帝国の没落を予告した。彼の計算によれば、『この勢力は……1840年8月11日に打ち倒される。そのとき、コンスタンティノープルにおけるオスマンの権勢は打ち砕かれると見込まれる。そしてこれは、私の考えでは、事実であることが判明するだろう』。」

まさに定められたその時に、トルコはその大使たちを通じてヨーロッパの連合列強の保護を受け入れ、こうして自らキリスト教諸国の支配下に身を置いた。この出来事は予言を正確に成就した。それが知られると、多くの人々がミラーとその協力者たちが採用した予言解釈の原則の正しさを確信し、再臨運動には驚くべき弾みがついた。学識と地位のある人々も、説教と彼の見解の出版の双方でミラーに加わり、1840年から1844年にかけてその働きは急速に拡大した。『大論争』334、335。

彼女がこの出来事を支持したことは、長年にわたり、ラオデキア的なセブスデー・アドベンチストたちによって、さまざまな方法で繰り返し攻撃されてきた。「seven times」と「the daily」の場合と同様に、この真理を攻撃することは、二枚の聖なる図表に示されている基礎を拒むことであり、また、預言の霊の権威も否定することになる。サタンがこの歴史への信頼を打ち砕こうと働いてきた理由は多面的である。

リッチの予測は「ミラーが採用した預言解釈の原則」を用いていた。ミラーには預言期間という要素についての洞察が与えられており、ミラーのメッセージが預言期間に基づいていたことを疑う者は、1843年と1850年のパイオニアの図表を見直すだけで、それが事実であることを確認できる。1840年8月11日以前、キリストの再臨に関するミラーの予測に反対する人々は、キリストがいつ再臨するかを理解するために預言期間を用いることはできないと主張した。彼らはしばしば、「その日その時は誰も知らない」という聖書の言葉を持ち出して、彼のメッセージと働きに抵抗した。

しかし、その日とその時はだれも知らない。天の御使いたちも知らず、ただわたしの父だけが知っておられる。しかし、ノアの日々のように、人の子の来臨もそうである。というのは、洪水の前の日々には、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁にやったりして、ノアが箱舟に入ったその日まで続いたからである。そして、洪水が来て、彼らをみなさらい去るまで、彼らは悟らなかった。人の子の来臨もそのようである。そのとき、畑に二人いると、一人は取り去られ、一人は残される。マタイによる福音書 24:36-40

この聖句にもかかわらず、ミラー派は自らの予言を裏付ける聖書的証拠があまりにも多いと見出し、活動を続け、後にホワイト姉妹によって示された原則に則って行動した。

「『その日その時は誰も知らない』というのが、再臨信仰の否定者たちが最もしばしば持ち出した論拠であった。聖句はこうである。『その日その時は、だれも知らない。天の御使いたちも知らず、ただわたしの父だけが知っておられる。』マタイ24:36。主を待ち望んでいた人々は、この聖句について明快で調和の取れた説明を与え、反対者たちがこの聖句を誤用していることを明らかにした。この言葉は、キリストが最後に神殿を去られたのち、オリーブ山で弟子たちと交わされた忘れがたい語りの中で語られたものである。弟子たちはこう問いかけた。『あなたの来臨と世の終わりのしるしは何でしょうか。』イエスは彼らにしるしを示し、こう言われた。『これらすべてのことを見たなら、それが近く、戸口にまで来ていると知りなさい。』3節、33節。救い主のある言葉を、別の言葉を打ち消すために用いてはならない。主の来臨のその日その時は誰も知らなくとも、それが近づいている時を知ると、私たちは教えられ、求められている。さらに、主の警告を軽んじ、その来臨が近い時を知ることが拒み、あるいは怠ることは、ノアの時代の人々が洪水の到来の時を知らなかったのと同じように、私たちにとって致命的であると教えられている。同じ章にある、忠実な僕と不忠実な僕を対比し、心の中で『わたしの主人は来るのが遅い』と言った者の結末を示すたとえば、キリストが、目を覚ましており、主の来臨を教えている者と、それを否定している者とを、どのように見なし、報いられるかを明らかにしている。『だから目を覚ましていなさい』と主は言われる。『主人が来たとき、そうしているのを見られる僕は幸いだ。』42節、46節。『だから、もし目を覚ましていないなら、わたしは盗人のようにあなたのところに来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたは

決して知らない。』黙示録3:3. 『大争闘』370頁。』

リッチの予言が成就したとき、「学識と社会的地位を有する人々が、説教においても彼の見解の出版においてもミラーと協力し、1840年から1844年にかけてその働きは急速に広がった」。ミラーのメッセージは、彼の予言解釈の規則が妥当な規則であることが確認されたとき力を得た。時の予言の成就を受けて、ミラーの規則が確認され、多くの人々がミラー派運動に加わっただけでなく、予言的に同じくらい重要だったのは、確認されたのがミラーの諸規則のうちの主要な規則であったという点である。また、その確認が、三つの災いの第二（それらはまた第五・第六・第七のラッパでもある）に関する予言の適用によって達成されたという事実である。

ミラーのメッセージに力が与えられたことは、ミラー派改革運動における最も重要な道しるべの一つとなった。それはイエスの洗礼によって予表されていた。それは、かつての契約の民（プロテスタント）に対する最後の試練の過程が始まったことを示すしるしとなった。そしてそれは、ミラー派の運動とメッセージ全体に対するサタンの攻撃の焦点となった。

「神の民が歩んできた過去の壮大な歴史について疑いを生じさせるためにサタンが人の心に呼び起こしうるいかなる問いも、サタンを喜ばせ、神に対する罪である。主が力と大いなる栄光をもってまもなくこの世に来られるという知らせは真理であり、1840年には、その告知を宣べ伝える多くの声が上がった。」『Manuscript Releases』第9巻、134頁。

2001年9月11日、第三の災いが予言の歴史に到来した。その出来事は、1989年に始まった第三天使の運動が採用した予言解釈の主要原則を確証した。その改革運動の使者に最初に開かれた真理は1989年に開示されたが、それはダニエル書11章の最後の六節ではなかった。すべての改革運動は互いに並行して進み、第三天使の運動である十四万四千の運動の特質を識別するために、線に線を重ねるようにして総合されるべきだという真理であった。私が初めて公に行った発表は1994年、あるいは1995年のキャンプ集会であった。その発表はダニエル書11章の最後の六節についてではなく、互いに並行して進む改革の諸系列についてであった。

2001年9月11日に、イスラムに関する第三の災いの予言が成就したとき、それは1840年8月11日に対応する出来事であった。1840年には、第一と第二の災いの予言がミラー派のメッセージを裏付け、2001年9月11日には、第三の災いの予言がフューチャー・フォー・アメリカのメッセージを裏付けた。その事実が認識されると、以前は主に一人の人物によるものだったその運動に、多数の人々が加わった。その後、その運動のメッセージと使者は攻撃にさらされるようになった。ちょうど1840年の歴史が、その後の数十年にわたってサタンの攻撃の焦点となったのと同様である。

Future for Americaの運動に加わった者たちは、その歴史の使者によってまとめられた予言解釈の原則を採用した。そうした原則の一つ、いやおそらく最も重要なものは、過去も現在も予言の三重適用である。その使者は、ある予言的真理が三つの特定の成就を通して例証されていることを理解するに至った。ミラー派の歴史が十四万四千人の歴史において繰り返されると信じ、1840年8月11日が2001年9月11日を予表していること、そして他

の聖なる改革線にもまったく同じ道標があることが見いだされた。

その後、ユダ族の獅子によって、第三の天使の系列において、あらゆる聖なる改革の系列が繰り返されていることの証拠が明らかにされた。ミラー派の歴史が十人の乙女のたとえを一字一句に至るまで成就したのと同様に、フューチャー・フォー・アメリカの歴史もまたそうであることが分かった。

「私はしばしば、五人は賢く、五人は愚かであった十人の乙女のたとえを引き合いに出されます。このたとえは、この時代に対して特別な適用があるため、文字どおりにすでに成就してきており、これからも成就します。また、第三天使のメッセージと同様に、すでに成就しており、時の終わりまで現在の真理であり続けます。」 Review and Herald, 1890年8月19日

黙示録10章の七つの雷は、1840年8月11日から1844年10月22日までのミラー派の経験、そして2001年9月11日から間もなく到来する日曜法に至る歴史を指し示すものとして認識された。

ヨハネに与えられ、七つの雷によって表明された特別な光は、第一天使および第二天使の使命のもとに起こる出来事の描写であった。…

この七つの雷がその声を発したのち、小さな書について、ダニエルと同様に、ヨハネに命令が下る。「七つの雷が語った事柄を封じよ。」これらは、順を追って明らかにされる将来の出来事に関するものである。セブンスデー・アドベンチスト聖書注解 第7巻、971ページ。

ホワイト姉妹が、第三の天使の運動は第一と第二の天使の運動と並行して進むと直接述べたことが認識された。

神は、黙示録14章のメッセージに預言の系列の中での位置を与えられ、その働きはこの地の歴史が終わるまで止むことがない。第一と第二の天使のメッセージは今の時にもなお真理であり、後に続くものと並行して進むべきである。第三の天使は大声でその警告を宣言する。「この後」とヨハネは言った。「私は、大いなる権威を持つ別の天使が天から下ってくるのを見た。地はその栄光によって照らされた。」この輝きの中に、三つのメッセージすべての光が結集している。『The 1888 Materials』 803、804。

第一と第二の天使の運動は、第三の天使の運動と並行している。第一と第二の天使の運動に力を与えた預言は、第一と第二の災いに関する時の預言の成就によって強められ、第三の天使の運動の力づけは、第三の災いに関する預言の成就によって与えられた。

1840年8月11日の場合と同様に、Future for America のメッセージが確認されたときには、『Future for America によって採用された預言解釈の原則の正しさを、多くの人々が確信し』、『アドベント運動に驚くべき弾みが与えられた』、『学識と地位のある人々が連合し』で Future for America に加わり、Future for America の預言的メッセージを『説教と出版の双方において』担った。2001年9月11日が預言の成就であることを明確に確認した Future for America の具体的な規則は、『預言の三重適用』であった。

第一と第二の災いに関するイスラムの基本的な見解を、両方の聖なる図表に示されているとおりに受け入れ、さらにそのメッセージを教えた人々の書面による証言と併せて考えると、第一の災いと第二の災いに結びついた特定の預言的特徴を認識することができる。聖書は、真理は二人の証人の証言によって確立されると、さまざまな仕方で繰り返し教えている。第一の災いの預言的特徴に第二の災いの預言的特徴が組み合わさることで、第三の災いの預言的特徴が確立される。イスラムの三重の適用は、2001年9月11日に第三の災いが到来したことを指し示す点であまりにも具体的であり、多くの人々はその証拠に目をつぶることを選んでいるとはいえ、見過ごすことは不可能である。

預言の三重の適用により、第三の災いが2001年9月11日に到来したことが確定した。そのとき、その規則が第二の天使のメッセージと直接結びついていることが見て取られた。第二の天使のメッセージは、ミラー派の時代にも、また十四万四千人の時代にも、聖霊が注がれる時期に当たる。両方の歴史はいずれも十人の乙女のたとえの成就であり、そのたとえにおいては、真夜中の叫びのメッセージのときに賢い者と愚かな者の区別が現れ、第二の天使のメッセージが力を受ける。

第二の天使のメッセージが終わりに近づいたころ、天からの大いなる光が神の民の上輝くのを見た。その光の光線は太陽のように明るく見えた。そして、「見よ、花婿が来られる。出て彼を迎えよ！」と叫ぶ天使たちの声を聞いた。

これは真夜中の叫びであり、第二の天使のメッセージに力を与えるものであった。落胆した聖徒たちを奮い立たせ、彼らを目前にある大いなる働きに備えさせるために、天から天使たちが遣わされた。最も才能ある人々が最初にこのメッセージを受けたのではなかった。天使たちは謙遜で献身的な者たちのもとに遣わされ、彼らに「見よ、花婿が来られる。迎えに出よ！」と叫ぶよう迫った。『初期の著作』238頁。

第一と第二の天使の歴史においては、真夜中の叫びが第二天使のメッセージに合流することによって、聖霊の注ぎがもたらされる。これは、第三の天使の歴史においても繰り返される。

天からの力ある御使いを助けるために、御使いたちが遣わされた。そして私は、至る所から響きわたるかのような声を聞いた——「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。あなたがたが彼女の罪にあずからず、またその災いを受けないために。というのは、彼女の罪は天にまで達し、神は彼女の不義を覚えておられるからである。」このメッセージは第三のメッセージに付け加えられ、それに結びついたように思われた。ちょうど1844年に真夜中の叫びが第二の御使いのメッセージに結びついたのと同じように、忍耐して待ち望む聖徒たちの上に神の栄光がとどまり、彼らは恐れずに最後の厳粛な警告を発し、バビロンの陥落を宣言し、神の民に彼女から出て来るよう呼びかけた。彼らが彼女の恐るべき滅びを逃れるためである。『霊の賜物』第1巻、195頁。

預言の三重適用という観点から言えば、第二の天使のメッセージは預言の三重適用を表している。なぜなら、いずれの歴史においてもそのメッセージは「バビロンは二度倒れた」というものだからである。

また、別の天使が続いて来て、こう言った。「大いなる都バビロンは倒れた、倒れた。彼女はその不品行による怒りのぶどう酒を、すべての国々の民に飲ませたからである

.」黙示録 14:8.

黙示録十章の力ある御使いは、1840年8月11日に第一の災いと第二の災いに関する預言の成就とともに降臨し、そうすることによって、2001年9月11日に黙示録十八章の力ある御使いが降臨することを予表した。その栄光で地を照らすその御使いは、続いて宣言をした

彼は力ある大声で叫び、こう言った。「大いなるバビロンは倒れた、倒れた。悪霊どもの住まいとなり、あらゆる汚れた霊の巢窟となり、すべての汚れた憎むべき鳥の檻となった。」ヨハネの黙示録 18:2.

第十四章の第二の天使のメッセージと、第十八章の力ある天使のメッセージは、バビロンが二度陥落したことを示し、また終わりの時代のバビロンを指し示している。終わりの時代のバビロンが誰であることを示すのは、かつてバビロンが二度、ニムロデの時代と、ネブカドネツアルからベルシャザルに至る時代に陥落したことが、「額に『大バビロン』と記された」黙示録17章の大淫婦の陥落の預言的特徴を確立しているからである。終わりの時におけるそのバビロンの陥落を識別するには、過去二度のバビロンの陥落という二人の証人が必要である。というのも、終末のメッセージは「バビロンは倒れた、倒れた」だからである。神のひとたびの御業によってニューヨーク市の高層ビル群が倒されたとき、力ある天使が下り、その宣言によって、預言の三重適用の原則が示された。2001年9月11日を神の預言の成就として確立したその預言の三重適用とは、三つのわざわいの三重適用であった。

その成就のとき、多くの人々がフューチャー・フォー・アメリカの運動に加わり、フューチャー・フォー・アメリカが用いてきた預言解釈の原則の正しさを確信した。1840年8月11日の出来事が繰り返されたが、その再現が立証したのは、聖書の預言において一日が一年を表すというミラーの主要原則ではなかった。というのも、フューチャー・フォー・アメリカの主要原則とは、第一と第二の天使のメッセージにおけるミラー派の歴史が、第三の天使の運動の歴史の中で繰り返されるということであったからである。

もし、シスター・ホワイトがサタンをそう呼ぶ「悪魔の陛下」による特定の攻撃の対象となったのが1840年であったのなら、2001年9月11日の歴史もまた同様の攻撃の対象となるのは自明のように思われる。したがって、グローバリストやイエズス会、CIA、ブッシュ家、あるいはそれらの勢力の組み合わせの関与を指摘する陰謀論が見られる。これらの理論は、いくつかの真実の要素を含んではいるものの、ニューヨーク市の巨大な建物群が倒れたのは神の御手が触れたからであり、そうして十四万四千人の運動の歴史に第三のわざわいの到来を印したのだという考えを退けるように意図されている。

「いま、私がニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という話が出ているのですか。私はそのようなことは一度も言っていません。そこに次々と階を重ねて建ち上がっていく巨大な建物を見ながら、私はこう言いました。『主が立ち上がり、この地を激しく揺り動かされる時、どれほど恐ろしい光景が起こることだろう！そのとき、黙示録18章1節から3節の言葉が成就するだろう。』黙示録第18章全体は、この地上に臨もうとしている事柄への警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかについて、私には特別な光は与えられていません。ただ、いつの日か、そ

ここでそびえる大建造物が、神の力によってひっくり返され、打ち倒されることは知っています。私に与えられた光によって、私は世に破壊があることを知っています。主のひとと言、全能の力のひと触れによって、これらの巨大な建造物は倒れるのです。私たちの想像を絶するほどの恐ろしい光景が起こるでしょう。」 Review and Herald、1906年7月5日。

陰謀論というものは、まったく真実を含まないものであれ一部に真実を含むものであれ、いずれも、その日に起きた出来事をもたらしたのは神の摂理的な働きであったという真理を損なう。そうしたさまざまな陰謀論は、真理に対するサタンの運動の外部からの攻撃であるが、サタンは運動の内部からも真理を掘り崩すように働いた。その内部からの攻撃の一つは、ヨエル書が扱っているのはローマであるとする見解を退けることに基づいている。

その論争については次回の記事で考察します。

ペトエルの子ヨエルに臨んだ主の言葉。これを聞け、長老たちよ。地に住むすべての者よ、耳を傾けよ。あなたがたの日に、あるいはあなたがたの父祖の日に、このようなことが起こったことがあるか。これをあなたがたの子どもたちに語り、あなたがたの子どもはその子どもに、その子どもはさらに次の代に語り伝えよ。葉食い虫が残したものを、いなごが食べ、いなごが残したものを、シャクトリムシが食べ、シャクトリムシが残したものを、毛虫が食べた。酔いどれどもよ、目を覚まして泣け。ぶどう酒を飲む者はみな、新しいぶどう酒のゆえに嘆き叫べ。あなたがたの口からそれが断たれたからだ。強く、その数は数えきれないひとつの国民が、わたしの地に攻め上ってきた。その歯は獅子の歯のようで、大いなる獅子の臼歯を備えている。ヨエル書 1:1-6。